

氏 名 瀬 口 昌 久
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学位記番号 論文博第 394 号
 学位授与の日付 平成 12 年 5 月 23 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当
 学位論文題目 プラトンの心身論の展開
 ——反二元論的世界像の探究——

論文調査委員 (主 査)
 教授 内 山 勝 利 教授 山 本 耕 平 助教授 中 畑 正 志

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、心身論の観点からプラトンの哲学を再検討し、心身二元論の祖としてプラトンを位置づけるきわめて強固な哲学史的伝統の誤りをただし、心身問題に対するプラトン哲学の意義を明確にすることを意図したものである。もっとも、ここで論者は狭義の心身問題だけを視野に入れているわけではない。近代的な世界観とそれにもとづく近代自然科学は、心や生命や精神を原理的に排除した要素的物体を世界理解の基礎として、客観的事実や知識が成立する領域を確立することによって目ざましい発展をとげてきたが、他方それは人間がいかに生きるべきかを支える価値や精神の世界を主観的領域として格下げした位置を与えることとなり、両者の間には埋めがたい分裂をもたらす結果をも招いた。こうした事態を踏まえるとき、今日心身問題として考察されるべき事柄は、物の世界に成立する知と精神の領域に成立する知との関係に置きなおしてみることができるであろう。したがって、本論文で取り上げる問題領域も、第1章で扱うような魂(心)と身体の関係にとどまらず、価値と事実の分裂という事態に起因するより広範な諸論点に及ぶこととなろう。

論文の構成は、おおむねプラトンの思想発展に即しつつ、前半部では『パイドン』『国家』での心身論の解明と、それに関連したいくつかの問題を扱い、後半部では、主としてプラトン後期思想における存在理解や認識構造の問題解明を通じて、さきに確認されたような見地がどのように継承され、発展させられているかを追跡するものとなっている。しかし、それは同時に、先述のような問題意識に対応させてみるならば、

- (1)部分と全体(第2章)
- (2)性差と社会機能/ジェンダー(第3章, 第4章)
- (3)物と知覚(第5章, 第6章)
- (4)生命と物質(第7章, 第8章)

という視点からの議論を含むものと言うこともできるであろう。

第1章では、プラトンが魂の不死の問題として心身問題を最も直接的に考察している『パイドン』の議論を検討する。この著作では、欲望や感覚が身体に帰せられるとともに、魂は知性のみに対応するものとされ、魂が身体から分離して純粹知性になりきることが哲学の課題であるという考えが表明されている、とみるのが従来の一般的解釈の基調であった。しかしながら、たとえば欲望について「身体を通じた欲望」という表現の仕方がされているように、『パイドン』においても欲望や感覚の主体は魂にほかならないことが見てとられる。また知へ向かう欲望・エロースは死後の魂にも想定されており、身体的欲望や感覚もけっして単純に身体に帰せられているのではない。想起説では、エロースを一つの動的要因としながら、感覚が、ネガティブな仕方ではあれイデア的なものの知を獲得するプロセスのうちに組み入れられている。さらに、感覚される事物はそのつどの知覚の場で相対的に成立するものであるとともに、原範型(イデア)の似像として考えられていて、したがって物理的實在によって知覚を因果的に説明するような物心二元論は、明らかにここでは採用されていないのである。『パイドン』における心身の厳しい対立の要請は、実は愛知(哲学)の勧めを根底にして、まったく物体性と身体に依存しない純粹な魂理念の創設にこそ重点がある。そして、そのことがかえって身体的活動やその生成に確固とした根拠を与える

ことにもなる。このような論者の主張は、『パイドン』解釈の全体に新たな視野を開くものとして大きな意義をもつとともに、論文後半部で扱われる、プラトンの後期思想における宇宙論的規模での問題考察に現れる「魂（プシューケー）」の位置との連続性と対応関係を確保することによって、プラトン哲学全体に一つの明確な見通しを与えることに寄与するものとなっている。

第2章では、『国家』における正義の探究にさいしてプラトンが採用している、個々の人間の魂と国家との構造的アナロジーの対応関係を分析し、国家が魂にとって、いわば第二の身体と見なされている、とする解釈を提出している。従来の解釈のように、魂の三部分と正しい国家を構成する三階層をそのまま対応づけた場合には、国家の構成員各自を魂の一要素に還元するというパラドクスが生じるか、逆に魂の各部分が人間に類推化されて、「魂の欲望的部分も知性をもつ」というパラドクスに陥るかのいずれかが帰結する。しかし、これはアナロジーの理解の仕方に起因するもので、プラトンは魂と国家のアナロジーに重ねて、身体モデルによる個人と国家の類比関係をも示唆していることに着目すれば、以上のパラドクスを避けながら解釈することが可能であると論ずる。また、そうした理解は、個々の人間が生まれつき異なった素質の差と仕事への適性をもっていることを前提としながら、正しい国家を構成することを可能にするとともに、さらにそこから現代の正義論の要請にも応じうるような仕方、構成員の社会的役割と報酬の適正な分配などが考慮されていることをも引き出している。

第3章と第4章では、第2章における国民各自の社会的役割の問題を敷衍しつつ、男女間の身体的差異にもとづくセクシヤリティやジェンダーの問題に焦点が当てられている。第3章における、この問題に対するプラトンの基本姿勢は、男女に等しい教育と機会が与えられれば、共に等しく適性に応じた仕事を果たすことができ、しかもそれが共同体にとって最善のありかたである、とするものである。『国家』第5巻における男女平等の職制の提案は、西洋の思想史上はじめて、しかも明確に性にもとづく職業や教育の区別を否定した主張として、画期的な意義をもったものであることを、論者は明らかにしている。さらに第4章では、女性の解放・身体の解放の思想と深いつながりをもつディオニュソス神をめぐる、ニーチェおよび彼の影響下にある一つのフェミニズムの立場におけるディオニュソス理解を踏まえながら、彼らが批判するプラトンにおけるそれを比較検討し、プラトン哲学にとってディオニュソス神がもつ肯定的な意義を明らかにしている。

第5章以下では、議論の場面を主としてプラトンの後期著作に移行させて、心身問題をより大きな視野の中で取り扱っている。特に第5章では、イデアを真実在と見なすプラトン哲学が、端的に「唯物論」に対して「観念論」を唱えているのではなく、イデア的実在と魂の活動を存在の基礎とすることによって、かえって物質的世界を含む存在の全体を統一的に把握し説明できるものとしている、とする解釈を強調している。それが最も鮮明に打ち出されているのが『ソピステス』において取り上げられているイデア主義者と物質主義者との論争に対するプラトンの対処である。彼はこの論争における両陣営に対して、「存在」を能動と受動の「機能・力（デュナミス）」とする新たな規定を提案し、そこに共通の基盤を確立する。ただし、その規定に従えば、不動のはずのイデア的実在が、知る・知られるという関係の場に置かれたときには変容をこうむるというパラドクスが生じざるを得ない。論者はこのパラドクスへの諸解釈を検討した上で、イデアに一定の変化を容認する立場も、知を受動的な働きとしてイデアの変化を免責する立場もともに退け、物的な変化（動＝キネシス）とは異なっていてそれを免れた能動・受動の関係を別に認め、それが「機能・力（デュナミス）」という概念によって表示されているのだとする新解釈を提案する。そして、この規定に従うならば、物質（物）であることは最終的な存在の基準ではないことになり、また他方イデアも端的に不動の実在であるにとどまらず、まさにそのようなものでありながら、そのデュナミスにおいて魂や現象世界との関係を開きうるものとなる。イデアの相互関係（コイノーニアー、シュンプロケー）という、後期プラトンの存在論・認識論の中心思想もまた、これによって可能性が与えられるのである。

第6章では、イデア論・魂論の側からの新たな物質・感覚事象の説明を支える根本要因の一つとして、『ティマイオス』において、理性対象としての範型（イデア）と、その似像としての感覚事象に加えて提示される「場（受容者）」という第三の原理を扱っている。プラトン自身も「困難で捉えがたい」と述べているように、その記述は重層的な比喻を通じてのみなされていることもあって、これまでさまざまな解釈が試みられてきた。論者はさきにとりわけ大きな波紋を投じたH.チャーニスの見解に異議を唱えつつ、当該テキストの整合的な解釈を見いだすことに努め、「場」の理論の明確化を試みている。その結果として、それを①物質やアリストテレス的質料と同一視してはならないこと、②虚空間や延長と解してはなら

ないこと、③鏡の比喩をストレートに適用してはならないこと、を論証している。それ自体としては、なおネガティブな論旨にとどまっているが、問題の所在を明確にしほり込んでいるのは大きな前進で、論者の解釈に一定の見通しをつけている、と言うことができよう。

最終部分をなす第7章、第8章では、生命事象や「生ける世界」を説明する原理として、古代アトミズムに対比させながら、魂あるいは宇宙靈魂を基軸とするプラトンの世界観の基本図式が提示される。

第7章では、古代アトミズムによる生命論の可能性と問題点が、特にその最も精緻な展開をなすルクレティウスの思想に即して検討されている。彼は、基本物体の一定の集合体である「種子」によって、生物の発生・成長、さらには遺伝のメカニズムなどにも相応に説得的な説明を与えている。そして、その種子に生命を付与しているのは物体からなる魂であるとして、さらにそれを身体全体にいきわたっている *anima* と、その *anima* を通じて身体を支配する *animus* とに区分することによって、原子論にもとづきながら精神の優位性に立った高度なサイコロジを構成している。しかし、その最終的な局面においては、感覚や思考の発動原理、多数のアトムを一つの魂として結合させ統合を維持する機能は、物質的同定を越えた「第四のアトム」（これをルクレティウスは「魂の魂」とも呼ぶ）に託されることになる。このようにして、明らかに、アトミズムは生命や意思をもたない物体による生命論を目指しながら、それが精密さを増すことによって、その原理を自ら逸脱する方向へと追い込まれているのである。

第8章では、それと対比的なプラトンの生命論的宇宙論に基本的な見通しを与え、そのメリットを明らかにすることに努める。さきに見たように、プラトンは人間を統括している魂の秩序を国家や共同体の秩序の考察に押し及ぼしているが、その観点はそこにとどまらず、あらゆる生命活動と生命世界を包み込む宇宙の秩序にまで及ぶものとして援用している。個々の生命体という魂のマイクロコスモス（小秩序体）から、国家という共同秩序体、自然世界を貫く秩序性、さらにはマクロコスモス（大秩序体）の全体まで、プラトンは同じ一つの心身問題という視点で一貫して捉えている。『ティマイオス』の自然万有の秩序の成立を受けて書かれた『クリテياس』において、プラトンは、人間の本来の営みとして、自然環境世界を「善く」秩序づける働きを強く要請している。人間が魂の秩序を失い、欲望を肥大化させることが、自然の荒廃と秩序破壊の原因に他ならないからである。上述したような、連動的一体性が全体を貫いている以上、こうした仕方では、自然的世界の問題が逆にわれわれの生き方の問題へと立ち返ってくることも、また当然であるとしなければならない。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イデア論と並行してプラトン哲学の根幹をなす「魂（プシューケー）」概念に焦点を当てながら、彼の思想の基本的企図とそれの照射する諸相を解明したものである。特に身体ないし物体と魂ないし生命とのかかわりにおいて、いわゆる物心二元論的プラトン理解を誤解として排し、後者により基本的な実在の位相を認めるプラトン独自の思考の内実を発展史的におさえるとともに、そうしたプラトン哲学の特質が、国家論、ジェンダー論、知覚論、生命論などの諸領域にわたる議論を通じて、どのように実質的に展開され、いかに有効に機能しているかを明らかにしている。

本論の全体は8章からなり、その議論展開は、ほぼ人間論的視野で心身の構図を扱った前半の4章（第1章～第4章）と、宇宙論的規模で物心のかかわりを考察した後半の4章（第5章～第8章）とに大別することができる。そして、その前半から後半への視野の移行は、そのままプラトンの初期・中期から後期への思想発展に対応づけられたものとなっていて、プラトン哲学における「魂（プシューケー）」概念の意味するものの基本線を、全体的に俯瞰しうる構成をなしている。

前半部の基礎論に当たる内容を展開した第1章は、主としてプラトン前半期の著作『パイドン』における心身論を扱いながら、論者の基本的立場を明確に打ち出し、論文全体の基調を固める役割を担ったものと位置づけることができよう。論者はここで、通念的には最も鮮明な心身（物心）二元論を提示したものと見なされている『パイドン』の記述をたんねんに辿り直すことによって、むしろ身体はそれ自体として独立の活動領域をなすものではなく、たとえば感覚的知覚や身体的欲求についても、あくまで魂（心）を主体とし原因としつつ、身体を「通じて」成立する過程に他ならないことを明らかにしている。さらには、物質主義に立つ「魂＝調和（ハルモニア）」説批判やそれに対峙されたイデア論的生成論が示唆するように、身体の成立もまた魂（心）に起因しているものとされる。この著作を一貫しているプラトンの立場は、論者によれば、心身の二元論的分離・対立ではなく、魂（心）を主体・実体として、言わば一元論的に人間存在を統一した仕方では把握し直

そうとするものである。したがって、身体性や身体的活動は、最終的には、魂（心）の活動の発現として、その領域のうちに帰着させられるべきものと見なされるとともに、まさにそのようなものとして、一定の積極的意味が与えられるのである。

このような論者の主張は、『パイドン』解釈の全体に新たな視野を開くものとして大きな意義をもつとともに、論文後半部で扱われる、プラトンの後期思想における宇宙論的規模での問題考察に現れる「魂（プシューケー）」の位置との連続性と対応関係を確保することによって、プラトン哲学全体に一つの明確な見通しを与えることに寄与するものとなっている。また以上の考察を踏まえることによって、論者は、人間論的領域においてもプラトンから新たな示唆を引き出すことを可能にしている。つづく3つの章では、論者は、『国家』における個人と国家とのアナロジー、プラトンの女性論・ジェンダー論などを議論枠として設定しながら、高次の心身統一として把握し直した人間観を具体的に展開するとともに、最近のさまざまな（特にフェミニズム的立場からの）議論に対して、鋭いプラトン擁護論を提出することに成功している。なお論者は、これらの議論においてのみならず論文全体にわたり、テキストの精緻な扱いによって、プラトンのきわめて周到な用語の使い分けや、さりげない表現に込められた深い意味を引き出すことを手法的に駆使しており、それが立論を説得的なものにするのに大きく貢献している。

第1章に呼応しつつ、論文後半部の基盤的議論を展開しているのが、第5章および第6章である。ここで論者は物心の問題を、プラトンの思想発展に即して、宇宙論的方向に拡張させ、後期著作『ソピステス』における「巨人戦争」すなわちイデア論者と物質論者との論争、および『ティマイオス』の宇宙論における「場（受容者）」の原理の導入に焦点を当てながら、物質性を實在の基礎として認定することを拒否するプラトン哲学のモチーフを確認し、その意味するところを明らかにしようと努めている。そして、それにつづく2つの章において、「魂」の後期的発展形態である「宇宙靈魂」を視野に入れ、プラトンの構想する「秩序体（コスモス）」すなわち物心の統一体としての世界のあり方の基本を展望している。こうした局面においても論者は一貫して独自の立場をとり、プラトンは端的に「唯物論」に対して「観念論」を唱えているのではなく、イデア的實在と魂の活動を基礎とすることによって、かえって物質的世界を含む存在の全体を統一的に把握し説明できるものとしている、とする解釈を強調している。特に、『ソピステス』の当該箇所において広義の「存在」の表徴として提出される「機能（デュミナス）」という用語に着目し、それをプラトンにおいては物体的作用に限定して用いられる「運動（キネーシス）」に対置させながら、前者の導入は物体とイデアとを統一的な次元において捉えなおす観点の確立を意図したものであるとする指摘は、いまだ論者によっても十分に展開され尽くしてはいないが、一つの可能な解釈として注目されてよからう。

以上のように本論文は、プラトン哲学の基礎をイデア論と魂（プシューケー）概念に置くとともに、しかしそれによって身体的・物質的位相を矮小化することなく、かえってそこにもより確固とした位置づけが与えられ、より豊かな意味が保証されるところの立場を一貫させることで、新たなプラトン像を提出し、そこから哲学的に有効な多くの示唆を引き出したものとして高く評価されよう。ただし、細部の論旨においてやや強引なところも散見される。また、プラトンの「心身論」としては、論者自身も認めるように、『ティマイオス』に詳述されている人間的身体と魂について、あるいは後期思想全般における「宇宙靈魂」についてのさらに立ち入った解明が、本来必要とされるところである。とはいえ、それらの諸点は今後に残された課題となるもので、本論文に固有の価値を大きく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成12年4月4日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。